

香 城

KATSURAGI

—泉州山岳会—

目 次

2003.3 ~ 2003.5

第**331**号
2003

<M チーム>

春山合宿・鹿島槍ヶ岳 東尾根	長井裕司	2
・鹿島槍ヶ岳 鎌尾根	石井浩二	4
・リーダー所感	北山峰生	6
白馬岳主稜	杉山 僚	7
五竜岳 G 稜	北山峰生	8
仙丈岳	岡本尚子	10
谷川岳東尾根	北山峰生	12
愛媛・八面山～三本杭～滑床縦走	松本明恵	14
能郷白山（山スキー）	石井浩二	15
北海道の山スキー	笠松マサエ	16
笹ヶ峰～火打山（山スキー）	村田和隆	17
遭難対策訓練（大山・元谷）	北山峰生	18

<B チーム>

春山合宿・白山	谷村洋子	19
	松本知子	19
・リーダー所感	榊田誠寛	20
山行記録		21
編集後記		22

<M チーム>

春山合宿・鹿島槍ヶ岳

2003 年 5 月 2 日(夜)～2003 年 5 月 5 日

CL 北山峰生 SL 杉山 僚 SL 吉田勇雄 名越真理子 木下春雄 長井裕司 上田健二 島 太一
坂口温己 岡本尚子 石井浩二 角田 浩 湯淺升夫

行動概要

	鎌尾根隊	東尾根隊
5/2 (金)	夜大阪発	
5/3 (土)	大谷原～鎌尾根～鹿島槍ヶ岳～冷池山荘付近	大谷原～東尾根・二ノ沢ノ頭
5/4 (日)	冷池山荘付近～赤岩尾根～西俣出合	二ノ沢ノ頭～鹿島槍ヶ岳～赤岩尾根～西俣出合
5/5 (月)	西俣出合～大谷原	
メンバー	CL 北山 SL 吉田 上田 島 坂口 岡本 石井 角田 湯淺	CL 杉山 名越 木下 長井

鹿島槍ヶ岳 東尾根

長井裕司

5 月 3 日 (快晴)

「鹿島槍ヶ岳」という名は響きが良く、槍ヶ岳を 2 つくっつけたような形も秀麗である。双耳峰なので、昔は「背比べ」などと呼ばれていたらしい。2 年前の春合宿で五竜岳に登った時、鹿島槍ヶ岳の姿が青空の中にくっきりと浮かんでいた。ちょうどその時、坪佐、笠松両先輩が鎌尾根から頂上を目指しており、自分もいつかは登って見たいと強く思った。

奇しくも今回の春合宿が鹿島槍ヶ岳に決まり躊躇なく参加を決めた。しかし、東尾根の場合中級ルートとはいえ雪稜あり岩峰ありということで、1 ヶ月のトレーニング期間ではたして間に合うのかという心配はあった。

春と夏の合宿はほとんど参加しているのだが、仕事の都合で冬の合宿は M に上がってから 1 度も参加できないでいる。どうしても冬はモチベーションが下がってしまう。今年も 2 月に台高の明神平から雲ヶ瀬山を縦走しただけである。それでも今回の山行は自分にとって大きな

ステップアップになると思いトレーニングに参加した。

北山、杉山両氏にしごかれながら出発の日はやってきた。天気予報では当分雨の気配はない。鎌尾根隊と別れ、赤布を目印に急な斜面を登り東尾根に取り付く。トップを命ぜられたので、自分にとっては少々オーバーペース気味に歩いてしまい、後々えらい目に遭うことになる。雪は予想より少なく、登山者は多く、しっかりとトレイルが出来上がっている。カタクリの花を踏まぬよう気をつけながらブナの林を抜けて行き、ところどころ藪こぎをしながら高度を稼ぐ。

ところが、本日のテント場である二ノ沢ノ頭の手前で足がつってしまった。まったくのトレーニング不足である。「泉州山岳会に入ってからの大ピンチや」と言うと、杉山さんに「毎回言ってるで」とつつこまれた。何とかテント場まではたどり着くが明日に不安を残すことになる。足がつって非常事態宣言を出したら、泉州山岳会始まって以来かななどと考えながら眠りにつ

いた。

5月4日(快晴)

アイゼンをつけて出発。朝のうちはまだ雪はしまっている。第1岩峰ではすでに先行パーティが取り付いており30分位待つ。2ピッチをアイゼンの爪を立てて登る。槇尾山での練習のおかげで技術的には問題は無かった。心配は足がつかないかと言うことだけである。

次の第2岩峰も雪は少なくまさに岩登りである。1時間以上待たされたが、核心部のチムニーを腕力で攀じ登り、ここも2ピッチで抜ける。後は荒沢の頭を抜け、北峰を目指すのみ。例年より雪は少なく雪底を踏み抜く心配は無い。

鹿島槍ヶ岳北峰頂上に到着。360度のパノラマが広がり、西の彼方に夏合宿予定の剣岳が見えた。次はあそこだと意を新たにす。ここでアイゼンを外し南峰へ向かう。この頃から足の方も調子が出てきて心配は無くなる。ところどころ土の露出した尾根をひたすら歩き、赤岩尾根の頭に着く。直接は降りられないので少し戻り、雪上をトラバースして尾根に入る。

雪上と夏道を繋ぎながらひたすら下る。雪も腐ってきて快適では無い。事故が起こるのは難しい核心部では無く、このような注意力が散漫になる箇所なのかもしれない。3時間程でメンバー各自数回はこけながら西股の出合に到着する。そこには鎌尾根隊の温かいミルクティーが待っていた。

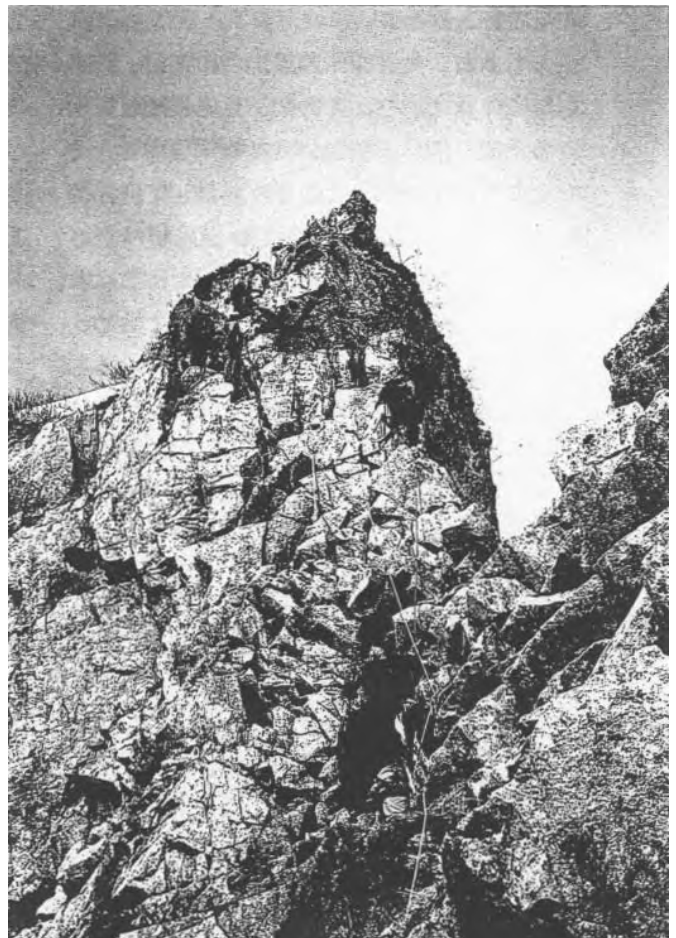
今回は例年より雪が少なく天気にも恵まれたので、結果として難しい所も無く無事に終了することができた。しかし条件が変われば、自然の脅威が牙をむくことだろう。それでも雪稜を歩くというのは目標であり、今後の自信にも繋がると思う。槇尾山でのアイゼン登攀の練習も十分効果があったと考えられます。

ただ個人的に途中で足がつってしまいボッカ力の不足の感は否めない。夏合宿では剣の雪渓をたらふく味わうことになるので、今度こそは減量し脚力もつけたいと思う。

フルモデルチェンジして参加しようと思います。乞うご期待。

<行動記録>

- 5/3 大谷原ゲート 7:20 ~ 東尾根取付 7:40 ~ 二ノ沢ノ頭 12:15
- 5/4 二ノ沢ノ頭 4:15 ~ 第1岩峰 5:15 - 5:45 ~ 第2岩峰 7:15 - 8:10 ~ 鹿島槍ヶ岳北峰 10:30 ~ 南峰 11:15 ~ 赤岩尾根の頭 13:05 - 13:30 ~ 西俣出合 16:30
- 5/5 西俣出合 7:00 ~ 大谷原ゲート 7:30



5月3日（快晴）

5月3日～5日の3日間、天気予報では全日晴天。トレーニング中散々に雨に叩かれただけはあった(?)と、往路高速を走る車内、胸中に快晴の北アルプスを思い描いていた。

先発していた北山、杉山両氏との再合流に若干手間取ったものの、ほぼ予定通り大谷原より入山。ここより、予報どおりの晴天の下に鹿島槍ヶ岳を望むも、雪は非常に少なく、正に「残雪」という感。実際、登り降り共に少なく腐った雪に苦戦を強いられることに。CLの判断で、予定していた雪上訓練を中止して先を急ぎ、本日の設営場所を主稜線上にすることとなる。

ともあれ、大谷原～西俣出合の道は、何事も無く快適に進む。この間、東尾根隊とは明日の合流を期して別れ、我々鎌尾根隊は、そのまま西俣出合へ。ここで、前後して進んでいた他のパーティーは全て赤岩尾根へ登ってゆき、北俣本谷を進むのは我々だけとなる。いよいよ周囲の地形も厳しさを見せ始め、時々、不気味な音を立てて岩と雪が崩れ落ちていた。

土が斑に混じったデブリを進むうちに、我々の登路である鎌尾根が現れる。地形図で確認していた通り、尾根の北東斜面は岩が剥き出した断崖になっていた。それを眺めながら「滑落するにしても、北東斜面へは絶対にダメだ」と肝に銘ずる。

突端の南西斜面より鎌尾根の稜線に取り付くことになる。急登であったが最初のうちは未だ雪量もあり、多少ブッシュが露出していたものの、ほぼ稜線に沿って登高できた。しかし、半ばほどから所々にシュルンドが現れだす。最初のうちこそ先頭を交代しつつ登

っていたが、この辺りになると、先頭をCL、後尾をSLに固めてもらい、慎重にシュルンドを迂回しつつ進む。最後、どうしても迂回しきれないシュルンドが現れ、止むを得ず底まで降りて登り直すことに。ここでは浮石の多い草付が露出しており、落石の危険もあったが、どうにか上部へ抜ける。

尾根の最上部、大きな雪庇が張り出しているが、先行者により既に切り通されており、そこを使って主稜線へ抜ける。ここでは万が一にも滑ったら大滑落になる恐れもあったので、ザイルを出し万全を期す。なお、何故かお線香の香りがするので首を傾げていると、主稜線の上には独り慰霊をなさっている方が…。1ヶ月ほど前、鎌尾根で遭難事故があったことを思い出す。登頂を果たし喜び合う我々の直ぐ横で、独り黙々と慰霊なさっている姿を見ていると、ふと、同じ登山者として、言葉で表せない思いがした。

荷物をデポし、空身で南峰まで往復する。直前の無線交信では、東尾根隊は既に設営して明日に備えているとのこと。山頂より設営場所と思しき場所を見ると、小さなピークに幾張りかのテントを見て取れた。荷物をデポした場所まで戻った後、暫く前進し、布引山と冷池山荘の中間辺りで我々も設営する。

5月4日（快晴）

朝、この日も予報どおりの晴天。テントを撤収し、アイゼン装着の上、早々に出発する。途中、冷池山荘の前で小休止した後、下降路である赤岩尾根へ。

主稜線から赤岩尾根へトラバースしている箇所には、「トラバースは危険だから、きっちり赤岩尾根の最上部まで行ってから取り付くように」という主旨の看板が設置され

ていた。しかし、そこから見る赤岩尾根の最上部は至る所にシュルンドがあり、通行は困難と思われた。止むを得ずトラバースすることに。腐った雪の中を慎重に進みつつ、何パーティーかと道を譲ってすれ違った上で、漸く赤岩尾根に取り付く。

雪に縁取られた岩の間を縫うように進み、高千穂平へ到着する。ここで赤岩尾根の行程は、距離的にその半分が終了したことに。ここから以降は樹林帯だし、やれやれもう安心...と思いきや、予想だになかったことに、ここからが核心となった。

少なく腐った雪の為、足場が非常に悪く、その上で進路は急下降。いっそ雪が無かったり、あるにしても質量ともしっかりしていれば、もっともっと楽だったと思われる。更には、ちょっとした岩場まで出現し、例外なく各員大苦戦...。もっとも、CLはクラウチンググリースードにて涼しい顔で滑っていたので、例外といえば例外だったのかもしれない。

ともあれ、昼過ぎには何とか西俣出合に到着する。一息ついた後、早速テントを設営する。その後、荷物の整理なども終わると、ふと完全に手すきになっていることに気が付く。後は晴天の下、テントの中で昼寝したり、雪解けの河原で流れに足を浸したりと、ノンビリした時間を過ごす。山行中、あそこまでノンビリしたのは初めてだったので、ノンビリしつつも、他の人と「...いいのかなあ？」などと尋ね合っていた。未だに、あの時のくつろいだ気分は忘れられないのだが...あれで良かったのでしょうか？

夕闇が迫る頃、東尾根隊が到着する。皆さん無事だがお疲れの様子。温かいコーヒーと紅茶を振舞い、無事合流を祝す。

5月5日（快晴）

全員集合の記念撮影の後、西俣出合を後にする。穏やかな日差の下、大谷原まで林道を

歩いた後、車に分乗し、車窓より北アルプスの山々を眺めつつ帰阪。

今回の合宿の感想を挙げるとすると、まず一番大きかったのが、ほぼ全行程をキックステップのみで歩いたということ。アイゼンを使ったのは、1日目幕営地～高千穂平の間のみだった。特に、鎌尾根の急登をキックステップで登ったのは、今後の自信に繋がったように思う。

翻って、天候が良すぎる程良すぎたのは、「合宿」としてはいささか問題だったように思う。風雨より春の日差の方が良いに決まっているが、被虐趣味かと思いつつ、激しい風雨や風雪を経験しておいた方が良いかなと思うので。これはBチームの頃より望んでいるのだが、未だ叶えられていない（合宿は何のかの言って好天続き）。まあその度に、「贅沢だ」と言われるのだが。

とは言うものの、今回の合宿が大成功であったのは間違いないと思う。Mチームに於ける初合宿にしては、自分もよく頑張れたのではないかと考えている。ただし、蛇足ながら付け加えると、Bチームの春合宿で無くしてしまった「とあるもの」、今回、又しても失くしてしまった。三度目の正直、来年の春合宿では失くさないようにしたいものです。

<行動記録>

- 5/3 大谷原ゲート 7:20～西俣出合 8:10～鎌尾根取付 9:30～稜線 15:10～鹿島槍ヶ岳南峰 15:50～冷池山荘付近 17:20
- 5/4 冷池山荘付近 7:15～赤岩尾根 7:45～西俣出合 12:45
- 5/5 西俣出合 7:00～大谷原ゲート 7:30

合宿を終えて - ワン・ステップのつぎに -

CL 北山峰生

なんと言っても天気にも恵まれたおかげで、鎌尾根隊・東尾根隊とも計画を消化し、成功裏に合宿を終えることができました。今年は5月の連休としてはあまりに雪が少なく、くわえて好天ゆえに雪の腐りかたも早く、決して快適とはいえない雪の状態でした。

サクッと登って楽しんだ人、少々苦労を重ねて疲れた人、不安いっぱいだった人、都合で参加できなかった人、それぞれに思うところが

* * * *

合宿に向けたトレーニングでは、基礎的なアイゼンワークと行動力の向上を重視しました。「歩く」ことにもっと慣れと自信が必要だと思われたからです。山登りにおいて、「歩く」ことは、その行動中の8割以上を占めると考えられます。したがって、「歩く」こと自体がひとつの技術であって、われわれはそれを十分身につけておくべきだと思います。単に体力の有無や、経験の差では片づけられない問題ではないでしょうか。

山は様々に姿を変えるので、そのような多様な状態に対応できるよう、自らの力の幅・奥行きを広げるのが、トレーニングの目的だと思います。そのためには、自分自身の力がどの程度であるのかを知る必要があります。負荷のかけかたにも、適量というものがありますので。

と同時に、所定のコースを、毎回同じ手続きで漫然と歩くだけでは、合目的的とは言えません。従来やっているように加重を少しずつ増していくこと、アイゼンをつけて歩くことなどのほかに、荷を軽くして早く歩いたり、休憩の回数を減らしてピッチを長くしてみるなどといった工夫が必要です。

あったのではないのでしょうか。

鎌尾根の登高ではシュルンドの迂回や草付きの泥壁に、赤岩尾根の下降では中途半端に露出した夏道に足をとられ、最後まで苦勞させられました。

雪山に限らず、状況次第ではルートの状態などいかにとも変化するというのが山の常識で、それを実感できたなら、十分意義深いものだと思います。

* * * *

どの程度の重量でどの程度頑張れるのか、どれくらい頑張りすぎるとバテしてしまうのか、バテたらバテたなりに最後まで歩き通すにはどうすれば良いか、というように、自分の体をよく知っておくことが大事なのです。

今合宿に関しては、短い期間で急場しのぎの調整を行った感がありますが、それぞれによく取り組んでくれたと思います。その成果は合宿での行動に現れていましたので、トレーニングの効果を十分に看取することができました。

しかし、最も大切なことは、目指すべき山行内容と自分の力を秤に掛けて、不足分を補うにはいかにトレーニングを進めるか、ということを各自で工夫することだと思います。その意味で合宿はスタート地点にすぎず、これからの活動で、本当の成果が問われることになるでしょう。

所詮山登りはしんどいことをわざわざやりに行くのだから、しんどさと上手につきあうことが、山を楽しむコツだとも言えるでしょう。シーズン真っ盛りの夏山、そしてきたるべき冬山へと想いを馳せて、今週もしんどい週末を迎えましょう。

2003 年 4 月 27 日(夜)~4 月 29 日

L 有永 寛 杉山 僚

今回の山行の発起人である北山、名越両氏が急遽不参加になったので、思いがけず有永さんと 2 人で登ることになった。私にとっては実質的に初めての雪稜で、研修的な要素が強いブレ春山合宿である。北山さんの「ガンバレ!!」という声が聞こえるような気がした。

4 月 28 日(快晴)

二股で車を止め、猿倉から白馬尻に入ると、右手に小蓮華尾根が見え、正面に白馬岳主稜が姿を現した。大雪渓を横切り、主稜へとつづく広いルンゼの上部を見上げると、いたるところにクレパスが走っていた。

主稜線に出ると、九十九折りに連なる雪をまとったピークが見えた。主稜は 8 峰から始まるが、目の前にあるピークの数 10 を越えている。全体的に雪が少なく、山肌には土が見えていて、稜線にはしっかりとしたトレースがつづいている。私がもっていた雪稜のイメージとは明らかに異なっていた。ルート図と照らし合わせて現在位置を確認しながら歩いていたが、そのうち、どこを歩いているのかわからなくなった。景色を楽しみながら快適な雪稜を歩いていると、目の前に急な雪壁が現れた。おそらくこの壁が 3 峰手前の雪壁に違いない。30m ほどの雪壁を登り切ると台地状のスペースが現れた。午後から雪が腐ってきたこともあり、今日の行動はここで終わり。斜面を少し切り崩してツエルトを張り、周りをブロックで囲んで暴風対策は万全である。

4 月 29 日(快晴)

昨日に引き続き快晴。朝起きると雪面が凍っていた。猫の額のようなところにツエルトを張っているので、足を滑らせたら終わりだ。目の

前には 3 峰、その先には 2 峰へとつづくスノーリッジがはっきりと見える。ここからが核心部だ。早朝、締まった雪にアイゼンが効いて不安はなく、主稜を登っているという実感が湧いてきた。白馬岳を背景に、スノーリッジに立つ有永さんが私を見ている。しっかりとしたトレースはどこまでもつづき、お天気にも恵まれ、抜群のロケーション。何という贅沢だろうか。有名な頂上雪壁も岩がかなり出ており、一目見ただけでは最後の登りだとはわからなかった。有永さんに「ここを登ったら頂上やで」といわれてびっくりした。ビバーク地を出発してからまだ 1 時間しか経っていなかった。

ところどころ、やせ尾根に雪がついたスノーリッジがあり、トレースがなかったら気持ちが悪いくところは多々あったが、結局ザイルは使わなかった。有名ルートであり入山者が多いということもあるが、雪稜というのは条件によってこれほど違うものなのか。

今回の天候と雪の状態であれば、白馬尻にベースを張れば日帰りでアタックすることも可能かもしれない。条件が良くあまり苦労しなかったが、雲一つない青空に浮かび上がった主稜を見ていると、入山者の少ないもっと雪の多い時期に、もう一度登りに来たいと思った。

<行動記録>

4/28 二股 6:00 ~ 大雪渓 8:35 ~ 主稜線 11:10 ~ 3 峰の手前 B.P.14:00

4/29 B.P.5:55 ~ 白馬岳 7:10 ~ 白馬尻 8:50 ~ 二股 11:05

2003 年 4 月 30 日～5 月 2 日**CL 北山峰生 有永 寛 杉山 僚**

連休と有休をフル活用して、合宿も含めた後立山 3 連戦を計画した。白馬、五竜、そして鹿島。結果として白馬は都合によりドタキャンしてしまったが、メインの五竜には気合い満々・不安少々で臨むこととなった。ただ一人全部参加の杉山さん、ご苦労さんでした。

4 月 30 日（雨のち強風）

入山 天気予報は大当たり。夜半からの雨にうんざりしながら、リフトの始発に乗る。行く手はガスに隠れて何も見えない。地図で見る遠見尾根は嫌気がさすほど長いので、方向を確認すると地図はザックにしまい込んだ。

小遠見、中遠見とすぎ、まだ半分にも達していないなあ、とひたすら歩く。不意に白岳沢のガスが引き、ほんの少し、五竜の裾が見え隠れした。ン？そろそろ降りなあかんのとちがう？有永さんも、「もうこの上、白岳やで」。思ったより早く西遠見についていたらしい。雨はみぞれにかわり、どんどん積もっていく。雪の状態が悪く、沢の下降は危険そうなので、ここでピバーク。

この日、列島上を通過した寒冷前線の影響が終夜つづき、L 字にカットした斜面の山側は吹き溜まりとなってツェルトが押しつぶされる。除雪のため、しぶしぶシュラフから抜け出す。

5 月 1 日（地吹雪のち快晴）

G 稜 地吹雪にたたかれて、気分は絶望的だった。五竜の各稜は、ここからいったん白岳沢の芯に降り、再び枝沢を詰めて取り付くのである。雪の状態一つで、アプローチ不能となる。来年出直すことになるのかと、眠れない夜を過ごした。

3 時に起床、出発用意をととのえて夜明けを

待つ。思ったほど降雪はなかったようで、雪面はクラストして快適だ。が……、沢のトラバースは安全か、ルートに行き詰まったときに撤退できるのか？心が揺らいで答えが出ない。だが、夜明けとともにひろがる景観はそんな不安を吹き飛ばすに十分だった。「行ける、行こう！」ルート図と対照し、あれが A 沢に G0、どこが G で核心部は 2 箇所、などと首を寄せ集める。

白岳沢を下降し、C 沢との合流点へ。このへんで日があたりだし、全身が解凍された気分。昨日はずぶぬれの後冷え込んだので、何もかも凍り付いていたのだ。巨大なデブリを乗り越えて C 沢を登り返し、適当なルンゼから G にとりつく。

いきなり不安定な雪壁だ。弱々しいハイマツにアンカーを求め、ザイルをフィックス。有永さんはユマールで登り、杉山さんがフォロー。尾根上に出るといたるところシュルンドだらけ。「これは時間かかりそうやなあ、覚悟していかなと。」と有永さん。

ナイフリッジのてっぺんを靴でつぶして、そろりそろりと前進する。先週は雨が多かったためか、5 月にしては雪が少ない。崩壊した雪の斜面にシュルンドが発達し、さらにヒドンクレバスとなって足下を脅かす。右に、左にとそれらを避けながら、早くも腐り始めた雪壁を登ること数ピッチ。左手からせり上がってくる枝尾根との、ジャンクション・ピークに到達。ここは 1 ピッチの短い岩登り。ハーケンを打ち足し、残置のカラピナは回収して、再び雪稜に出る。

うおお、こらヤバイ！C 沢側に雪庇が発達し、それが根本でザクッと割れて、尾根上に縦のシュルンドが走っているのだ。薄っぺらいスノー

ブリッジをソーッと越えて、怪しげな腐れ雪にピッケルを蹴り込む。振り返ってみると、キレイしてくれている杉山さんは巨大なキノコ雪の上にいた。知らぬが仏というもんだ。

ここまでくると、主稜線は目前だ。雪壁を1ピッチ詰めたら最後の岩峰だ。左手のルンゼか、正面のルンゼか、二通りのルートが見いだせそう。ここは正面のルンゼを選択し、ブッシュを頼りに浮き石だらけの凹角を抜ける。上半部は薄く被った雪がグサグサに腐り、気持ち悪いことこの上なし。傾斜が落ち、ほっと一息つける地点でピッチを切る。最後の雪壁約20mは、杉山さんがトップで登り、Gの頭へ至る。

ここまでずっと緊張の連続で、のども胃袋も限界寸前。テルモスの紅茶にブランデーを含ませ、やっと人心地をつく。

今回も、ここまで誰にも逢わず、我々だけの静かな山行だった。雪の状態が悪く、次々に現れるシュルンドと胸を突く雪壁に難儀したが、その一つ一つにラインを見だし、自力でクリ

アしていくことは山登りの最大の魅力である。

5月2日(快晴)

下山 昨日はG登攀後、五竜山頂までの登りで力つき、結局五竜山荘のコルでビバーク。稜線直下の適当な斜面で、早朝の雪練。今後の課題も多いが、本日のところは引き上げる。

コルから白岳の南斜面をトラバースして、直接西遠見に下る。ここからはひたすら下を目指すのみ。2日前とはうってかわって大盛況の遠見スキー場へ降り立つ。

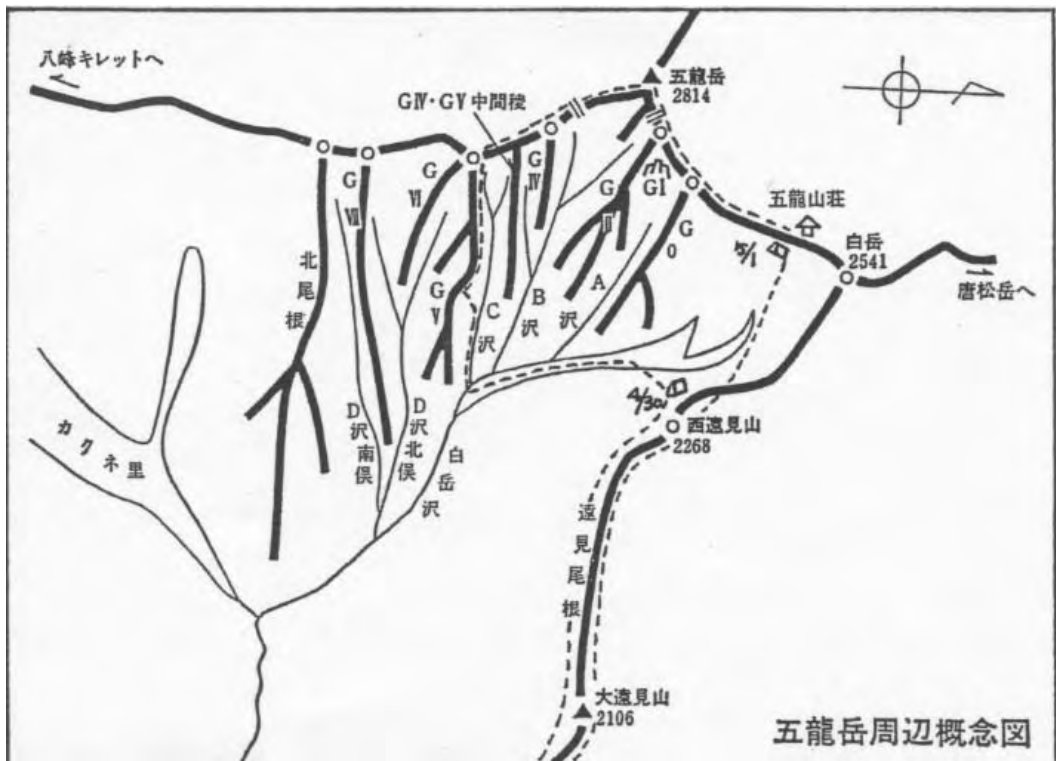
イメージ通りの登攀を実行できて、幸せ一杯の満ち足りた気分だ。鹿島槍スキー場でメンバーの到着を待ち、合宿に向けて不安なし。

<行動記録>

4/30 リフト降り場 9:00 ~ 西遠見付近 B.P.12:15

5/1 B.P.5:45 ~ G 取付 6:45 - 7:30 ~ Gの頭
14:20 - 14:50 ~ 五竜山荘 B.P.16:40

5/2 B.P.7:30 ~ テレキャビン乗り場 9:30



2003年3月20日(夜)~3月23日

CL 村田和隆 SL 大崎義治 松本明恵 島太一 岡本尚子 角田 浩

3月が終わってしまう前に 3000m級の雪山に登りたい.....。

冬の間にそかに抱いていた想いがついに叶い、いざ初めての南アルプスへ!!

3月21日(快晴)

初春のやわらかな陽射しを全身いっぱいに浴びて、駐車場をあとにする。戸台川沿いに右岸(進行方向の左側)を歩き始めるが途中で道が途切れ左岸に移動、第二堰堤でまた右岸に歩を変える。その後雪原を横切り左岸へ。徐々に顔を大きくのぞかせている彼方の山は甲斐駒ヶ岳、左のぎざぎざは鋸岳と教えてもらう。初めての南アルプス、山の名前をまたふたつ覚えられたことに心が弾む。

長く長く続く林道歩きと雪面に反射する強烈な太陽の光に次第に参りはじめ、早く山の中木々の中に入りたいと思う。ようやく赤河原分岐に到着した。戸台川駐車場から今日の目的地北沢長衛小屋までは高度差約一千メートル。ここからが正念場だ。八丁坂の急登をみな黙々と歩く。うしろを振り返ると青い空の下に中央アルプスの薄っすら白い峰、明日は360度のパノラマが望めることだろう。北沢峠に登りつくと、夏は人で賑わうだろう南アルプス林道のバス停留所標識が、深い雪に埋もれ少しだけ顔を出していたのに驚いた。長衛荘から林道を下り、北沢長衛小屋前にテントを張る。テント場近くに滾々と湧き出していた冷たく透きとおった水をたっぷり汲み、大崎さん特製の絶品豚汁で満腹になった後、早々に就寝する。

3月22日(曇り)

「あれ? くもってる」昨日の素晴らしいお天気はどこへやら、自称曇り女(時々小雨)の私が

いるからか。昨日来た道を登り始めてまもなく南アルプス林道左手に、少し前までトレースがあったらしき登山口を発見する。仙丈岳頂上までの高度差は昨日と同じく約一千メートルあり、相当のラッセルを覚悟し一歩二歩踏み出したところで、単独行の男性が現る。長衛荘前の登山口から登るようで、さっさと先に行ってしまった。ここはショートカットコースらしい。私たちもあとに続く。先ほどの男性のものが、トレースがついていて少しほっとする。

順調に登り、大滝頭に到着。このあたりは傾斜も少しなだらかだ。途中から、単独行の男性と15名ほどのパーティ、それに夫婦1組と私たちの4パーティでラッセルを交代しながら進む。森林限界を過ぎたあたりから、広い斜面の急登がはるか上方まで続いていた。その直前にほんの少しラッセルをしていた私のあまりの遅さに業を煮やしたか、ご夫婦が先頭にとってかわる。男性はしばらくしてダウン、その後の女性のラッセルがすごかった。ピッケルを前方に突き刺し、まるで怒っているかのように雪を蹴散らし勢いのあるラッセルに、女性の後ろにいた私の「変わりましょうか...?」という声も見事かき消され、とうとう急登をほとんど一人で登りきってしまった。

小仙丈岳に着くと、広大なカールが広がり、進む先に何個か見える小さなピークの奥に一番高い仙丈岳が見えた。そんなに寒く思わないのに、オーバー手袋で止まらない鼻水を拭いたらすぐに凍ってしまいびっくり! ポリタンも凍結し、自分ではどうにも開けられず島さんの力を借りる。小仙丈岳を過ぎてまもなく、これぞ雪山というような両側がキレ落ちたナイフリッジ

が目の前に現れた。初めての経験に少しうきうきしたが、落ちると下まで行くだらう、一步一步緊張しながら通る。最初ちょっぴり怖がっていた松本さんも難なく通過した。少し登ったところで真っ白な羽をふくふくさせて歩いているライチョウを発見!しかもつがいで。その姿はとってもかわいくってずっと見ていたい気がした。

稜線を進んで行くと、はるか先を歩いていたご夫婦が立ち止まっていた。「時間切れなので」と言う。正午だ。「えっ…」ここまできて、あんなに強い人たちがやめる?一気に不安になる。その場にいた単独行の男性も相当バテている様子、ここから村田さんの力強いラッセルが始まる。しかし仙丈岳はあとひとつふたつまだ向こう、さきほどの不安感とバテも手伝い、弱い気持ちがいったりきたり、岩場の斜面を登りそして下る。また登りか...重い足取りでふと上を見上げると、そこには山名板を片手ににっこり微笑んでいる村田さんの姿があった。突然、前がかすんで胸がつまってもう上を見ることができなくなった。冬山合宿を直前にドタキャンしリーダーはじめ皆に迷惑をかけてしまったこと、いろんな思いが一気に押し寄せてきた。3,033m登頂、ばんざーい。皆と固く握手を交わす。360度の大パノラマはなくとも、感動はあるんだ...。少し遅れて角田さんが登頂、頂上直下の急登を登る私たちを写真に収めて下さっていたことを、後になって知った。

記念撮影後、お天気の心配もあり安全な場所まで下山を急ぐ。行きは恐る恐るだったナイフリッジも、トレースが踏み固められていたせいかあっけなく通り過ぎる。樹林帯に入る頃に雪が降りはじめた。風もなく音もなく静かに降りそそぐ雪は、Bチームの冬山合宿で行った白い上高地を思い出させた。

3月23日(快晴)

朝起きると体が重い。昨晚の夕食で残ったカレーを元気モリモリ食べる男性陣をビックリ眺める私。今日もまばゆいほどの快晴だ。アタッ

クの日だけが曇りだったなんて皮肉な気もするが、そんなこともあるさ気にしない。帰りは多くのパーティに出会い、明るく賑やかな下山だった。登りで苦しんだ八丁坂、下りも気を引き締める。戸台川沿いの林道からは、甲斐駒ヶ岳の白い岩峰を名残惜しく振り返りながら、思い思いの速さで歩く。行きは途中で途切れたかと思われた右岸に道があったことが分かった(ただし落石注意)。二日ぶりの駐車場に着き、全員の無事下山を喜んだ。すぐ近くに新しく出来たらしい仙流荘で入湯。家へのお土産はテント場で汲んだ南アルプス天然水で、ハブニングといえば、私がそうとは気づかず角田さんの足を枕がわりにして寝ていたことぐらいか。

準備段階から、村田さんはじめメンバーの皆さんに助けられた。下界から望む青空の下高くそびえる仙丈岳、自分があのピークに立っていたことが信じられなかった。春山合宿は絶対にがんばろう、初めて山にこんな強い気持ちを持った。

<行動記録>

- 3/21 戸台駐車場 7:40 ~ 赤河原分岐 10:05 ~ 北沢長衛小屋 B.C.13:45
- 3/22 北沢長衛小屋 B.C.5:50 ~ 大滝頭 9:40 ~ 小仙丈岳 10:35 ~ 仙丈岳 12:35 ~ 北沢長衛小屋 B.C.15:40
- 3/23 北沢長衛小屋 B.C.6:10 ~ 赤河原分岐 7:40 ~ 戸台駐車場 9:30

2003年3月20日(夜)~3月21日

CL 北山峰生 有永 寛 坪佐圭子 名越真理子

じつはこのルート、昨年12月にはあえなく敗退してしまったのでした。その時「3月にもういっぺん行く！」と決意したとおり、今回は満を持しての再挑戦です。

3月21日(曇りのち晴れ)

東尾根 「なんか雪少なそうやなあ」と、それが朝一番で表に出たときの印象だった。なぜそのように思ったのかは、今となってはわからない。

予想天気図では高気圧がガバッと覆ってくることになっている。夜明け前こそガスっているものの、好天を信じて出発。なんせ怖いのはアプローチの雪崩である。仮眠など取る間もない。

林道はすっかり雪に埋没し、年末とは様相が一変している。このへんはさすが豪雪地帯。トレースにも助けられて、約1時間で一ノ倉沢出合に到着。あいにく上部は雲が垂れこめて見えないが、一ノ倉をひたすら詰めていく人々の列。さすがに3月にもなると大盛況だ。目指すは滝沢リッジあたりだろうか。列の先頭はガスのなかに吸い込まれていく。

さて、我々は冬休みの宿題を片づけるべく、一ノ沢を目指すこととする。気持ち悪いデブリを乗り越えて、一ノ沢の出合へ。ン？トレースがない！出発が遅かったためすでに何パーティかは入っているものと思っていたが、幸か不幸か、見覚えのある、まささな雪面がせり上がっていたのだった。

このところ弱い冬型が続き、ここらへんはある程度降雪があったのだろう。ここまでは予想通り。気温は低く、雪のしまりも良さそうだ。迷わず沢芯の登高を決意する。比高差約500m、ひたすらラッセル。

シンセンのコルまで来るとさすがに風が出て、肌寒い。ヤッケにアイゼン、ハーネスを装着する。すっかり雪をまとった稜は快適そうだ。前回引き返した第2岩峰は、すぐ目の前にたちはだかっている。本当に目の前だ。前回はたったこれだけの距離に、どれだけ苦労したことが...。マチガ沢側を巻いて、岩峰の基部に達する。ここでザイルを装着、前回敗退したルンゼを正面突破。第2岩峰上部の雪壁は、しばらくコンテで進む。雪壁とは名ばかりで、しつこいラッセルが続く。

突然足下が崩れたと思ったら、どでかいヒドンクレパスが口を開けた。危うく踏み抜くところだった。ここからはスパッと切れた雪稜に変わり、マチガ沢側にはどこまでも雪庇が続いている。即座にスタカットに切り替え、一ノ倉沢側をトラバース。雪の量は豊富なので、岩肌に足を取られるようなことはない。だが、万一にもスリップしたら、まさかさまにどこまでも落ちていくだろう。踏み込んだアックスなど、無に等しいようなフワフワの新雪だ。

昼も近くなってくるとガスは消え去り、青空の下に輝く雪稜がすばらしい。雪庇を警戒して、慎重に歩を進める.....と、突如「バシッ」と音を立てて、亀裂が走る。有永さんの突き刺したピッケルが、雪庇の根本を切り裂いたのだ。思わず確保の手に力がこもる。

やがてシミのような点だった第1岩峰が、くっきりはっきり目の前に現れた。基部を大きく右手に巻いて越えると、頂上はもはや射程距離。とはいえ、アイゼンのツアッケでサクッと行ければ話は早いのだが、最後にだめ押しのような猛ラッセル。単独行の兄ちゃんが後ろから追い

ついて来るが、ここまで来て追い越されるのもしゃくなので、休憩なしで頂上を目指す。

すでに尾根は斜面の一部に吸収され、ひろい雪壁状をなす。最後の約 10m ほどは堅雪のつまった凹角を抜け、左ヘトラバースの後雪底に風穴をぶちあける。ヨッシャ～、これで頂上や！振り返る白嶺に、脈々とのびる我らがトレース。もう一度、ヨッシャ～。

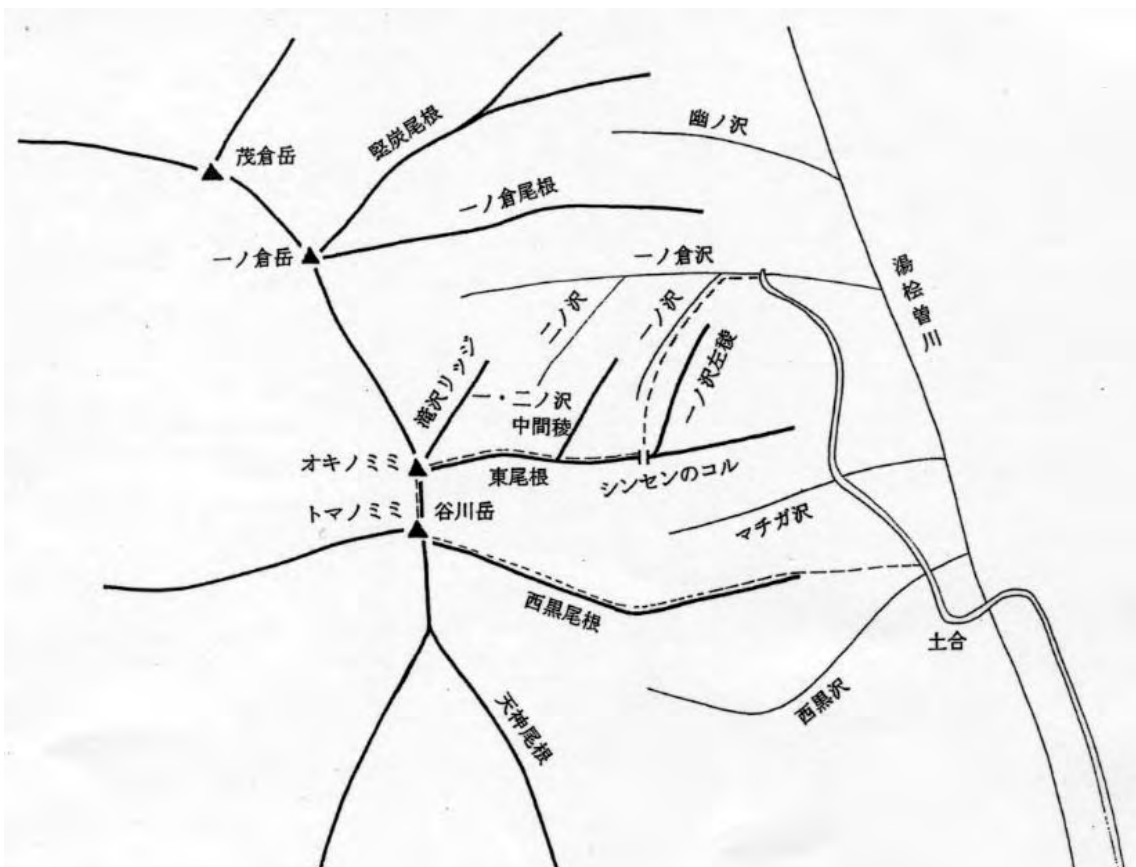
有永さんとお互いに記念撮影。続く坪佐・名越パーティも登頂し、これでホッと一息。まだ日は十分高いし、下降路の西黒尾根もはっきり見えてるし、これはもう一気に下山すべし、と

一目散に下降する。途中、西黒尾根から仰ぎ見た東尾根は、自分が登ったとは思えないくらい、鋭角的でカッコいいスカイラインであった。

すきっ腹に 2 時間ばかりの道のりは長く感じられたが、心はもはや下山完了。あの、あったか床暖房のロビーへと。

<行動記録>

3/21 土合 5:20～一ノ倉沢出合 6:25 - 6:50～
シンセンのコル 8:30 - 9:10～オキノミ
ミ 13:55 - 14:45～土合 16:50



＜M チーム＞ 愛媛・八面山～三本杭～滑床縦走

松本明恵

2003 年 5 月 2 日(夜)～5 月 3 日

松本明恵

幼きころ、土手に座りいつも眺めていた古里の山。鬼ヶ城山系には自然林が残っており、動物の名が付いたコルが幾つもあることを知って、八面山から三本杭の縦走を計画した。三本杭は標高 1226m の山で、高い山ではないが標高 0 m から登る山である。概念図を頭の中にたたき込む。眠れぬままバスの中で朝を迎え、幼きころよく歩いた長い登り坂を野川登山口へと歩く。

AM7:20 登山口(標高 50m)。晴れ、市街地を眺めながらのんびりと朝食！下草が朝露にぬれ、視界の利かない薄暗い農道歩きに身体が重い。リズムが取れず、早くも自分との格闘が始まり、一番辛い 30 分であった。早く明るいところに出たいと気があせる。

AM8:00 農道終点(393m)。今度は展望の利かない階段(俗に泣き坂と呼ばれている)が続く。突然、伐採された明るい尾根になりほっとする。目の前の谷向こうに大きな尾根がのび、四本松が現れる。植林地、伐採地をゆっくり歩き、時には足を止め、市街地を眺め、黙々と歩き、暑さとの闘いが始まった。

AM9:10 四本松(721m)。切り開かれたスペースに心地よい風が吹き、松の古木が立ち、目の前に宇和海が青く輝く。市街地の真ん中には宇和島城、大空にはトンビが「ピーヒョロロ」と、優雅な舞い姿が私の心を癒してくれる。四本松からの登りはまたも植林地帯で、薄暗く、自分の足音に驚き、一人歩きの淋しさを感じ、これが「森林浴」なのだ自分に言い聞かせる。薄暗い登山道から解放されると、そこはお社跡のきれいに整地された尻割山(998m)であった。尻割山からの展望は四本松以上で言うことなし。昼寝でもしたいが時間がないので「鹿の

コル」へと急ぐ。しかし、すぐにスーパー林道と合流し、目の前を数台の車が通り過ぎていった。誰に会うことも無く登り続けた 3 時間だったのに……気軽に車で登れる山になっていた。

AM10:10 鹿のコル(1030m)。幕営地には最適。コルから一步登山道に入ると、そこは別世界で、植林された杉林と違って、展望は利かぬが新緑とシャクナゲの自然林に変わり、気が付くと鬼ヶ城への分岐を見逃していた。鬼ヶ城は次回にと決め「猪のコル」へと歩く。視界が開けた「猪のコル」から萌黄色に輝く権現山(952m)を望み、愛媛県と高知県の県境の稜線歩きを楽しむ。

AM11:20 八面山(1165m)。山名の通り 360 度の大パノラマで、高月山、三本杭が見える。少し下りぎみの稜線歩きでは、見事な大自然のブナ林とその巨木に圧倒され、身体一杯にグリーンシャワーを浴び、自然の凄さを感じ「熊のコル」へ。そして、150m の高度を一気に登り「3 本のたるみ」に！アセビで赤く染まったドーム型の三本杭の全容が目の前に。

PM12:15 三本杭(1226m)。360 度のパノラマは低山とは言え魅力のある山で、目の前に鬼ヶ城山系の最高峰の高月山(1228m)が見える。三本杭を背に横の森をながめ、ブナとシャクナゲの咲き乱れる檜尾根を御祝山へと下り、杉林の急坂を滑床へと下山。今回行けなかった「猿のコル」は次回へと…。

＜行動記録＞

野川登山口 7:20～四本松 9:10～鹿のコル 10:10～猪のコル 10:55～八面山 11:20～熊のコル 11:45～三本杭 12:15～御祝山 13:20～滑床 14:05

<M チーム>

能郷白山（山スキー）

石井浩二

2003 年 3 月 22 日(夜)～3 月 23 日

L 杉山 僚 吉田勇雄 石井浩二

ゲレンデスキーからして今シーズン始めたばかりながら、すっかりスキーにはまってしまった私は、今回もスキー目当てで参加していた。前日夜に、能郷谷林道を入れるところまで入って幕営していたが、山肌には雪は殆ど見当たらず、すっかり意気消沈してしまう。

杉山、吉田の両先輩による協議の結果「スキーは担いでゆこう。滑走不能なら最悪荷物になってしまうが」と言うことで、半ば諦めつつも淡い期待を抱きながら出発。林道を詰めて登山道への分岐に至ると、雪が若干現れるが、滑走にはとても足りない申訳程度の量。登山道の登りに入ってもあまり変わらない。しかし、滑走できることを信じてひたすら登っていると、雪量は徐々に増えだして辺りは銀世界になった。

途中、シール登高に切り替えるが、ペースが上がらず両先輩の足を引っ張ってしまう。天気は良く、快適な稜線の登高。前山からは、遠く白山や別山まで見渡せた。前山から能郷白山の間も、快適な稜線歩きが続く。しかし、能郷白山に近づく頃、尾根が一部痩せている個所が現れ、左右どちらへも転倒すれば即滑落。杉山さんより「ここは絶対に転倒してはダメ」とのアドバイス。慎重に、どうにか通過。

能郷白山への最後の登りはかなりの急斜面に見え、ピッケルとアイゼンによる登高でも厳しいのではないかと思えるほどだった。内心尻込みした私は「ここで待ってましようか...」。「じゃ待ってて」という返事を期待していたが、「もうちょっと登ろうか」「いよいよになったら、そこでスキーをデポして登ればいいし」と両先輩のご返答が...。腹を括る。

先導する吉田さんより「東斜面へは出来るだけ近づかないように」、後ろに行く杉山さんからは「もうちょっと登高角度を上げよう」等々、アドバイスを受つつ登る。無我夢中で登っていると、大分前を行ってたはずの吉田さんが目の前に現れる。どうしたんだろう？と思っていると、「よう頑張った」とのお言葉。案ずるより産むが安し。いつの間にか登頂していたらしい。

シールを外し、いよいよ滑降。両先輩より「行けるか？」と問われるも、大丈夫ですと返答。根拠無くそう返答した訳ではなかったが、やはり緊張と不安はあった。スキーカーニバルで西村さんに教えてもらった斜滑降、それを琵琶湖バレーで自習したこと等々を思い出しながら、行ける！と自分に言い聞かせつつ滑降開始。

吉田さんのコース指示も有り、転倒することなく稜線に帰ることができた。後は前山まで、再度シールを装着しての稜線歩き。前山からは再度滑降。転倒しないことを第一に滑るが、安全な場所も結構あったので遊び心を出す。樹林の間を縫ってターン。あっという間に下ってしまう。最後は、往路を外れて林道を滑降してゆくことに。慎重に、かつ快適に、雪の無くなるところまで無事滑降する。

天候と雪質、共に恵まれた快適なスキー山行だった。私の山スキー原風景になったように思う。当然ながらまだまだ技量不足ゆえ、毎回今回のようには上手く滑れないだろうが、これからは機会を見つけてどんどん滑りたいと思う。

<行動記録>

能郷谷林道 6:45～前山 11:20～能郷白山 13:05
～前山 14:45～能郷谷林道 17:50

2003 年 4 月 26 日～4 月 29 日

L 坪佐圭子 笠松マサユ

坪佐さんからの誘いで、またもや話しに乗ってしまい、閑空 12 時過ぎの女満別行きに搭乗。初日はオシンコシンの滝などを見てホテル泊。ホテルにスキーの板を送っておいたので、ザック 1 つで行けるのが有り難い。いつもの如く車つき、ナビつきである。

4 月 27 日（晴れ）

斜里岳 ホテルから登山口まで 1 時間程、雪は割りとすぐ出てきて板にシールを貼り歩き始めるが、延々林道、地元の人にはショートカットの道を知っているのかも知れない。スキーの跡がある、と思いつつも忠実に行くしかない。清岳荘まで 4 時間もかかってしまった。ここまでは、ごくごく緩い傾斜。清岳荘は今は跡形もない。毎年 6 月～9 月だけプレハブの建物が出来るそうだ。さあここから、と気持ちを引き締め歩き始める。一の沢を詰めて行くのだが、ほど無くでっかい動物の足跡。「坪佐さん、これ何？」「動物やる!!」(熊やんか)と思ったけど口に出しませんでした。ずーと、これから先、私達が行く方向に足跡があって(熊も歩き易い所、選んでるやんか) 笛を吹きつつ前進するが、下二股あたりでタイムリミットになってしまう。残念!! 次回は作戦を考えて、と言う事になる。

4 月 28 日（曇り）

雌阿寒岳 オンネトー茶屋奥のパーキングに車を停める。広いキャンプ場だが誰もいない。歩き出すと間もなく登山届の箱があり、届けを出しておく。夏道通りに進むが、すぐに梯子が出て来て坪佐さんは板のまま上がって行くが、私には出来ない。出だしがこれでは先はどうなるんだろう、とゴチャゴチャ気持ちが迷ってしまう。外したスキーを又つけ先行する坪佐さん

を追う。5 合目あたりの急坂で谷筋を詰めて行きづまり、「ヨシ、デボして行こう」と一旦はなるが、ツボ足の事を考えるとためらってしまう。空身で尾根に一人あがり、後から少しずつスキーをパスしてあげる。そこからは「また行けるで～」だった。コルが見えてくる。風が強くなり、硫黄の臭い、白煙も風に乗って私達の方に流れてくる。コルから見ると右旋回しているような頂上に「我慢、我慢」で歩くが風で身体がよろける。雌阿寒岳の看板の所に着くと斜里岳がダメだったので 1 つでも登れて良かったという思いがした。

阿寒富士 コルまで降り、笠松はザックを置いてアイゼンだけ持って上がる。阿寒富士はジグザグに雪がつき下は凍っていて、登り始めてすぐにアイゼンを着ける。風は雌阿寒岳よりましだが火山灰がアラレの様に降ってくる。

雪が連続して付いてれば、快適に滑れそうと思う所が幾つかあったが切れている。コルより下で板を履く。さあ、期待のスキーだ。行くぞー。うまく滑りたいなあ。坪佐さんは狭い谷筋を右に左にターンしているが、私は出来ない。終盤ちかく、雪と木の根っこに突っ込んで、しばらく身動きがとれなかった。登りに詰まった所では下りも詰まり、一人が先行して降り、上から板を放り投げては拾い、また履いて滑る、といった具合だった。登り始めより少し下に出て終了する。

<行動記録>

4/27 清里 6:15～清岳荘 10:15～下二股 11:20～
清里 14:50

4/28 オンネトー 6:00～雌阿寒岳 10:40～阿寒
富士 12:15～オンネトー 14:15

2003 年 5 月 9 日(夜)～5 月 10 日

L 村田和隆 西村 晶

ひと月振りにまた火打山へ登りにやって来た。前回は反対の笹倉温泉側からアタックしたが、途中で予定していたルートに雪崩の危険が見えたので、急遽、隣の焼山へ変更、しかし、低気圧に追いかけられ、結局、強風とどしゃぶりの雨の中、ずぶ濡れになりながら途中下山した。しかも 3 年振りのスキー山行で、簡単な斜面も満足に登れず、スキーもよたよたの状態、消化不良の山行だった。そこで、前回いっしょだった西村さんに無理を言って付き合っていただき、当初予定していた笹ヶ峰からの再アタックとなった。

今年は例年より雪が少なかった所が多かったようだが、妙高一帯だけは例外で、頂上付近でまだ 4m 前後の積雪があった。大阪から夜の北陸道、上信越道を経て、妙高 IC から笹ヶ峰林道の駐車場所まで 500 キロ余りをひた走る。駐車場所直前まで雪はなく、滑れるのか少し不安になったが、登山口のある林道沿いによやく 50 センチほどの雪があった。

翌朝、5 時過ぎにスキーを担いで、車のすぐ横の樹林帯から出発した。外は思ったより肌寒い。沢沿いを枝を除けながら縫うように進むと、1 時間ほどで黒沢橋に到着した。ここから樹林帯をジグザグの急登となるが、すぐに富士見平へと続く明るく開けた尾根に出た。そこで初めてシールを付け、スキーを履く。晴れて風もなく、シャツ 1 枚で歩くのにちょうどいい爽やかさだ。傾斜の緩やかなコースを快適に進むと、すぐにまあいい、雪をかぶった火打山が見えた。やがて三角形の形が特徴的な高谷池ヒュッテが見える。黒沢岳の左斜面をトラバースしてヒュッテに滑り降りると、ひと月前までは雪ですっ

ぱり埋まっていたヒュッテもすっかり姿を現し、登山客を出迎えていた。しばしベンチに腰を下ろして、のんびりと火打山を眺める。すでに 6～7 人が登り始めていた。

休憩後、まだ雪にすっかり埋まっている高谷池の上を通り過ぎ、天狗の庭の方へと進む。ここから火打山の稜線への急な登りとなる。慣れないスキーの登りで、力がうまく板に伝わらない。途中でスキーアイゼンを付け、ようやく登れるようになった。それでも西村さんにはどんどん離されてしまう。なんとか遅れないようにしながら、ようやく火打山山頂へ着いた。ここまでは十分な雪があったが、頂上だけが雪がない。東には妙高山が、西には焼山が、火山らしい火口のある風貌をゆったりと見せている。前回登って来たルートもよく見渡せ、火山活動の跡である賽の河原が、巨大な溝を伸ばしていた。

そして、いよいよ頂上からの滑降だ。雪はシャーベット状だが、そんなに緩んだ感じはなく、適度にブレーキがかかって滑りやすい。思い切って滑り出すと、大きな弧を描きながら、久々に宙に浮いたような快感をしばし味わった。ヒュッテから 1 時間以上もかかって登った斜面も、わずか 11 分ほどで滑り降りる。振り返ると頂上が遠くなっていた。この辺りはガスがかかるかと非常に迷いやすいコースでもあるようだが、来シーズン、みんなでまた来よう。

<行動記録>

5/10 笹ヶ峰林道 5:10～高谷池ヒュッテ 10:30
～火打山 11:55～笹ヶ峰林道 15:30

＜M チーム＞ 遭難対策訓練（大山・元谷）

北山峰生

2003 年 2 月 28 日(夜)～3 月 2 日

CL 杉山 僚 SL 北山峰生 坪佐圭子 長井裕司 大崎義治 島 太一 岡本尚子 上田健二

今回の遭対訓練は、雪崩に対する警戒と対応、および搬送を主題として実施した。当日の反省と注意点は以下の通りである。

3 月 1 日（雨）

1. 弱層テスト

通常雪柱の直径は 30～40cm、深さは 70cm 程度とされているが、抱えきれの程度の径で、根本までまっすぐ作ること。倒れたら危険なのではなくて、倒すのに要する力が、層によって強弱のあることを確認することが目的である。

2. 積雪断面観察

弱層テストと共通して言えるのは、あくまでも相対的な強弱を確認しているにすぎない、ということ。

3. ビーコン操作

ビーコンの発信音と発光の情報を最大限にくみとるには少々コツがいるようだ（特に複数検索のとき）。

イ．電波の指向性があるので、必ずしも最至近距離で最大反応がでるとは限らない。

ロ．デジタル式は、一定時間経過後、自動的に発信モードに切り替わるため、搜索者間で呼吸を合わせる必要。

ハ．搜索範囲を 2m 四方程度まで絞ることができたら、ピンポイント搜索に固執せず、にすぐ掘り起こすこと。

ニ．ゾンデを用いたシミュレーションでは、ビーコンのみを単体で埋めても現実的ではなく、ザックなどを使用する方が良い。

4. 埋没体験

呼吸空間の確保が大切で、酸素消費は予想以上に早い。

5. 雪洞構築

直接雪崩と関係しないが、緊急時対策の一環として行った。ザックを用いた雪洞構築の簡略化を検証しようとしたのだが、いまのところ人数にみあう雪洞を作ることは難しい。

3 月 2 日（曇りのち晴れ）

6. 搬送

7 人パーティで負傷者 1 人の場合を想定したが、4 人程度のパーティであればルート工作や搬送の負担など、相当困難になることが予想される。今回は登攀具の携行を前提としたが、登攀具がない場合の想定も必要だろう。

イ．負傷者は肩から首が冷えやすいため、マットなどを用いて冷えを防ぐ。枕の使用は非常に快適。

ロ．カラピナ等を包んで搬送の支点を作る場合、負傷者の梱包以前に支点を作ること。

ハ．負傷者のセルフビレイにはテンションがかからないようにしないと、確保ロープが均等荷重にならない。

ニ．ルート工作を効率的に進めるには、フィックスの設置に 2 人、回収に 1 人以上が必要。

ホ．ルートの状況によっては左右の配置換えを行う必要があるため、シートに作った支点の全てに引き手を付けておくことと良い。

最後に、雪崩が起きるかどうかの判断は、雪の状態、斜面の状況に加えて、入山前の天候などすべてを総合して考えること。ほんの一部分のテストですべてが判断できるのではない点を、また来年確認しよう。なお、搬送は、消防士長井さんのアドバイスで円滑にすめられました。

＜B チーム＞

春山合宿・白山

谷村洋子 松本知子

2003 年 5 月 2 日(夜)～2003 年 5 月 4 日

CL 榊田誠寛 SL 坪佐圭子 山倉康次 笠松マサエ 大崎義治 向井宏之 田島保江 谷村洋子
安岡和子 星野安男 松本知子

5 月 2 日

つい先日、B チームの第 1 回ルームに出席するために、泉州山岳会の事務所のドアを神妙な顔で開けたのに、今日は、21 時梅田集合で白山合宿への出発である。渉外担当より別当出合まで車で入れるとのこと、気になる天気も申し分なしの予報とくれば、B チーム 6 人の日ごろの行いの賜と内心小躍り状態の私。

5 月 3 日

朝食はどこに入ったかわからないような有様で 5:36 に出発する。出合より、そこそこの積雪ルートとなる。さすが白山！しかし、坪佐リーダー曰く「一昨年より雪少ないね……」

久し振りの荷物と雪に、ひたすら目線は足元ばかりの歩行で、前の人に離れないようにと頑張る。顔の汗が落ちるのも夏と同じようだが、雪原をわたって吹く風は、ひんやり心地よい。甚乃助避難小屋の上の方で、雨具をつけての滑落停止の練習は、身に付くほどには遠かった。快適なペースで幕営地に到着。2 張り設営後、山倉リーダーの心づくしの素麺を食べたり、青空の下でのんびりとオフタイムを過ごす。

5 月 4 日

皆さん手際よく出発準備を済ませる。いざ！というまさしくその時、な、ナントこの私スバツを着けるのを忘れている。「リーダーのみなさんごめんなさい」と心で詫言ながら「ゆっくりで良いよ」の慈悲深い声。急ぐのは気持ちだけで、情けないことこの上なし。あゝ朝から大失敗。

まだ朝早く、アイゼンは気持ちよく効き、内股気味の癖に気を付けながら登ると室堂センタ

ーに到着。以外にも営業中で登山者の姿あり。ここからは、夏道通しに雪もなくアイゼンはずして全員頂上に立つ。北アルプスも彼方に楽しむことができ、満足してテント場へ。

昨日の砂防新道をこれから下山との指示で、今年の春山のフィナーレを迎える。リーダーのサポートと天気と風邪薬に助けられた山行となった。

(谷村記)

私にとって「白山」が生まれて初めての雪山でした。しかし、前回の屯鶴峯でのトレーニングでバテてしまい、同行の皆さんに迷惑をかけてしまったので、無事下山するまでずっと不安でした。アイゼンワークも練習の時は、「楽しいですね」と言いましたが、実際に雪の斜面を歩いて何度も怖いと思いました。特にトラバースしている時、次の足の置き場に困り迷っているうちにフラついたり、足元の雪が崩れて落ちそうになった時は、冷や汗がどっと出ました。

途中、甚乃助避難小屋近くで滑落停止の訓練はしましたが、本当に滑ったとき、とっさに対応できるかどうか不安に思いました。歩いている間は全く余裕がなかったので、荷物を降ろし、テントを設営してやっと少しほっとしました。着いてすぐ、山倉さんにご馳走して頂いたそうめんは、特別美味しかったです。

まだまだ景色を楽しむ余裕もないほどですが、体力を鍛え、経験をつんで色々な山歩きをしたいと思います。

ありがとうございました。

(松本記)

<行動記録>

- 5/3 別当出合 6:30 ~ 甚之助避難小屋 10:00 (雪
上訓練 10:15 - 11:30) ~ 南竜小屋 (B.C.)
12:40
- 5/4 南竜小屋 (B.C.) 5:30 ~ 室堂 7:00 ~ 白山 (御
前峰) 7:55 ~ 南竜小屋 (B.C.) 9:30 - 10:10
~ 別当出合 13:00

<リーダー所感、梶田誠寛>

今年の春合宿は、好天に見舞われ楽しい合宿が出来ました。毎年のことながら、メンバーにとって、春合宿はトレーニングがほとんど出来ないうちに参加しなければならないという事があります。まして、生まれて始めて雪の山に行った人にとっては、白山といえども多少怖い目にあったようでした。しかし、予定どおり頂上もきわめることが出来、雪山初経験の人にとっては、一生の思い出になったと思います。

今年のBチームから、運営の方法を変えました。固定のリーダーは一人だけで、山行毎にリ

ーダーを募集する方式を始めました。この春合宿には、リーダーに山倉さん、坪佐さん、笠松さん、大崎さんが参加していただきました。初めての試みで、多少不安があったのですが、多くのリーダーに参加していただいて、不安も吹っ飛びました。

Bチームは、泉州山岳会の要です。これからもBチームの応援よろしく願いいたします。OBの諸先輩方のご協力も期待しております。



<山行記録>

<Mチーム>

No.5888 武奈ヶ岳

3月1日

L 松本(明) 中谷

No.5890 大山・元谷(遭対訓練)

2月28日(夜)~3月2日

CL 杉山 SL 北山 坪佐 長井 大崎 上田

島 岡本

No.5891 大峰・釈迦ヶ岳

3月8日(夜)~3月9日

L 木下 上田 村田 松本(明)

No.5892 谷川岳東尾根

3月20日(夜)~3月23日

L 北山 有永 坪佐 名越

No.5893 取立山(山スキー)

3月8日(夜)~3月9日

L 榊田 西村(晶) 吉田 石井

No.5894 仙丈岳

3月20日(夜)~3月23日

CL 村田 SL 大崎 岡本 松本(明) 角田

島

No.5895 能郷白山(山スキー)

3月22日(夜)~3月23日

L 杉山 吉田 石井

No.5899 宝剣岳周辺(雪上訓練)

4月5日(夜)~4月6日

L 杉山 北山 吉田 木下 長井 石井

湯淺

No.5900 丹沢山

5月2日(夜)~5月5日

L 宮尾 北尾 塩野

No.5901 背振山

5月16日(夜)~5月19日

L 宮尾 坪佐 笠松

No.5903 雌阿寒岳, 阿寒富士

4月26日~4月29日

L 坪佐 笠松

No.5905 春山合宿・鹿島槍ヶ岳

5月2日(夜)~5月6日

CL 北山 SL 杉山 SL 吉田 名越 木下

長井 上田 島 坂口 岡本 石井 角田

湯淺

No.5906 後立山後面の雪稜

4月27日(夜)~4月29日

白馬岳主稜 L 有永 杉山

4月30日~5月2日

五竜岳 G 稜 CL 北山 有永 杉山

No.5907 台高・伯母ヶ峰

3月30日

L 上田 会員外1名

No.5908 奥高野・清水ヶ峰

4月2日

上田

No.5909 宇和島・八面山~三本杭

5月2日(夜)~5月4日

松本(明)

No.5910 大峰・小峠山

5月6日

L 上田 会員外1名

No.5911 西穂高岳~奥穂高岳

5月16日(夜)~5月18日

L 北山 杉山

No.5912 火打山(山スキー)

5月9日(夜)~5月10日

L 村田 西村(晶)

No.5914 大台ヶ原~大杉谷

5月18日~5月19日

L 島 会員外3名

No.5915 上多古川(沢登り)

5月16日(夜)~5月17日

L 上田 大崎 湯淺 石井

<Bチーム>

No.5897 蓬萊峡

4月5日(夜)~4月6日

L 榊田 坪佐 笠松 坂口 岡本 田島

安岡 星野 谷村

No.5904 屯鶴峰

4月19日(夜)~4月20日

L 榊田 星野 安岡 田島 松本(知) 向井

No.5913 春山合宿・白山

5月2日(夜)~5月4日

CL 榊田 SL 坪佐 山倉 笠松 大崎 田島

安岡 向井 星野 松本(知) 谷村

No.5916 槇尾山(岩登り)

5月17日(夜)~5月18日

L 上田 大崎 湯淺 石井 星野 松本(知)

谷村 池間 向井 榊田

<編集後記>

アルピニズム全盛の時代、厳しい山行を目指すことが目標の一つになっていました。厳しい山行というのは何を意味するのでしょうか。初登攀を目指した時代、前人未踏のルートを切り拓くという意味では確かに厳しかったかもしれませんが、そういう厳しさ、技術的な厳しさというのは異なるような気がします。

技術的な厳しさという観点から考えると、実力を越えた山行はすべて厳しい山行といえます。しかし、トレーニングを積んで実力がつけば余裕をもって登れるようになり、過去に厳しく感じた山行も厳しくなくなります。

一般的に、山岳会で活動していると山を見る目が養われ、いろいろな登攀技術を必要とする山に興味の対象が広がっていきます。そして、今までできなかったことができるようになると自己の可能性が広がり、さらに技術的に難しい(厳しい?)山に登りたいという気持ちが高まってきます。しかし、早かれ遅かれ、みんなどこかで頭打ちになります。

実力より少し厳しい山行をすると大きな達成感が得られますが、技術的に難しい山行を目指すことがすべてではありません。自然の懷に抱かれて自然の偉大さを感じながら歩いたり、自然の草木や生き物たちと会話をしながら歩くのもまた楽しいものです。

例会やルームでは、知識や技術の向上をテーマとすることが多いのですが、難しい山行が必

ずしも価値があるわけではありません。自分自身の目指す山登りを安全に行うために、お互いに知識を身につけ、技術を磨こうではありませんか。

(杉山記)

お知らせ

ルームの大掃除を行い、装備の棚などの模様替えを行いました。収納関係の備品が充実し、コピー機も新しくなりました。

また、雪崩対策の一つとして、ピーコン2台を共同装備で購入しました。ピーコンは原則として個人装備となりますので、購入される方は次の機種を買って下さい。

機種：オルトボックス X-1 (輸入販売元：

(株)マジックマウンテン)

泉州山岳会会報「葛城」

第64年2号(通巻331号)

2003年春山号

編集人 杉山 僚

発行所 泉州山岳会

〒590-0027

堺市榎元町2-1-9小野木ビル3F

TEL&FAX 0722-21-4454

<郵便口座>

記号14130番号74088061

名義 泉州山岳会